

## 聴覚障害教育における言語運用力育成（その 6）

企画者	高井小織（京都光華女子大学） 村松弘子（愛知県立豊橋聾学校）
司会者	宮下恵子（千葉県立千葉聾学校）
話題提供者	白井一夫（新潟薬科大学） 阿部敬信（九州産業大学） 小川征利（岐阜県立揖斐特別支援学校）
指定討論者	高井小織（京都光華女子大学） 藤本裕人（帝京平成大学）

KEY WORDS: 聴覚障害 思春期 言語運用

### 【企画趣旨】

私達は、本学会の自主シンポジウムで、聴覚に障害のある児童生徒（以下、聴障児生）の思春期における言語課題に迫る Good Practice（良き実践例）を、10 年間で越えて積み上げてきた。2020 年秋にはこれらの過程と実践を整理し、そこから見えてきた仮説と併せて冊子にまとめ、全国の聾学校や教育行政機関等に配ることができた。今回は、この制作過程を含めて私達の取組を俯瞰し、より広く理論的検討を問うことでこれまでの取組の総括を行いたいと考えている。

超早期からの介入で丁寧言葉に育まれた聴障児生が、学童期から思春期を迎える時、自分自身と周囲や社会の両方に向き合いながら言語を運用しその力を伸ばしていく。私達が考える言語運用力とは、①メタ認知・自己認識の発達とともに②他者（集団や社会も含む）と関わり③時間軸をもち自己の置かれた状況の中で鍛え磨かれるものである。

理論的検討として、言語運用のモデル、評価、そして、さらに各地の実践場面を把握するときの課題について検討していきたい。活発な論議ができることを期待する。

### 【話題提供】

#### (1)言語運用に関わる諸問題とそのモデルの検討

当シンポでは、その重要性が指摘されながらも検討が進まなかった「思春期の支援」に関する豊かで貴重な実践を取り上げてきた。当シンポの歩みは、実践を集積し、原則や方向性を探る「トライアルアンドエラー」の歩みでもあった。「言語運用」はそんな中で確認しあってきた中核的概念でもある。

本報告は、冊子所収の各実践の意義について包括的に検討した上で、「言語運用力に関するモデル」を紹介する。紹介するモデルは、実践を分析し理解を共有するための分析装置であると同時に、更なる実践構想の見取図でもある。

さらに、「言語運用力」について「言語運用と言語能力を峻別する」Chomsky の見解を踏まえつつ、第二言語習得研究の知見に触れながら、「能力伸長パフォーマンスの充実か」という観点から触れていきたい。新潟薬科大学（白井一夫）

#### (2)聴覚障害児の言語運用力の評価―「聴覚障害のある生徒の言語運用力の評価に係る質問紙」調査の結果から―

当シンポで話題提供者等が語ってきた Good Practice なるものの“Good”とは何を評価しているのかを明らかにしたいと考え、質問紙調査を実施した。すなわち、聴覚障害児の言語運用力とは何かを探索的に明らかにし、評価の枠組みを示したいと考えた。その結果、「言語運用力」を構成する要素は、個人の「思考」「判断」「理解」「学習」といった認知に関わる活動と中核となる「言語」の能力と、自己を俯瞰するもう一人の自己といったメタ認知的な能力、そして、個人内に所属

する能力だけではなく、周囲との関係性の中で見えてくる能力、それによって、自己をコミュニティの中に位置付けていく能力までが要素として示された。

本報告では、評価の枠組みがこのような 3 層構造となることを示した上で、特に 3 層目となる「周囲との関係性で見えてくる能力から、自己をコミュニティの中に位置付けていく能力」について、第二言語習得研究における相互行為能力（interactional competence）(Johnson, 2003) という視点から話題を提供していきたい。九州産業大学（阿部敬信）

(3)言語運用とこれからの実践的課題―Good Practice の継承聴障児生の言語運用を取り巻く課題として次の 3 点について述べる。1 点目は、言語運用とアイデンティティーに関わる課題である。「今、ここでのリアルな関係の場」において言語運用とアイデンティティーの様相が変容していく実践の報告の重要性について述べる。2 点目は、言語運用力の評価に関わる課題である。言語運用力を「言語運用技術」と「言語運用意欲（動機）」の 2 つで構成されると仮定した上で、評価に関わる課題を述べる。3 点目は、言語発達に関する実践的課題と Good Practice の継承という観点からの課題である。ろう教育で多く語られてきた「9 歳の峠」に絡んで「自己中心的事物」に目を向けた実践に取り組むという課題と、経験知から明示知化への努力を通して Good Practice の継承を図ることの必要性について述べる。

岐阜県立揖斐特別支援学校（小川征利）

### 【指定討論者の趣旨】

各地での連続した教育実践を、思春期の聴障児生の言語運用という視点で切り取り記述し摺り合わせてきた。3 名の話題提供者から提示された理論軸をもつことで、様々に異なる状況下であっても、それらを紡ぎ次世代に繋がる発信をする意義と条件について考えたい。京都光華女子大学（高井小織）

聴覚障害教育の実践知として、今まで検討を行ってきた Good Practice から、言語運用（力）に関する教育実践としての理論的な背景が見えつつある。このことについて、研究成果を汎化し、実践者への指導方略（strategy）としてどのような展開ができるか考えたい。帝京平成大学（藤本裕人）

（文献）

Johnson, M. (2003) A Philosophy of Second Language Acquisition. Yale University Press.

(TAKAI Saori, MURAMATSU Hiroko, MIYASHITA Keiko, SHIRAI Kazuo, ABE Takanobu, OGAWA Masatoshi, FUJIMOTO Hiroto)